原　　著

異形論
～近世ヨーロッパの博物誌における「未開」概念の表象～

松平　俊久*

A Study of Monsters
—Representation of the "uncivilized" concept in the natural history of modern Europe —

Toshihisa Matsudaira*

Abstract

This paper is one consideration about "monsters" which treated by the natural history of modern Europe. There is not necessarily much research on monsters made so far. However, the many have argued that monsters are "the representation of fear" . Then, in this paper, monsters are considered to be "the cultural representation" from a viewpoint "monsters created culture".

First, it was argued how monsters were full of the natural history of modern Europe by making into a key the relation of a certain naturalist and monster drawn as a motif of an old 50 Switzerland franc bill. Next, it was stated how monsters should have been interpreted, seeing the etymology of monster, and the history of record and so on. Then, "variant" and "negative character" which have been conventionally mentioned as features of monsters were set aside, and raised "relation" with human being. Why is the feature of monsters variant? And is it negative? In order to obtain the answer of these questions, monsters as the "uncivilized" concept were considered based on social and cultural context of modern Europe. Forthermore, the relation of monsters and human being were discussed. So, it found out monsters were asked for the "difference".

*早稲田大学大学院人間科学研究科
博士後期課程

*Graduate School of Human Sciences,
Waseda University

Those day, the naturalists were positive to collection of curious things in the "uncivilized" world. In fact, there is also a current of the Age of Great Voyages and many new animals and plants were brought to Europe. The phenomenon is called "uncivilized usurpation" in this paper. Furthermore, by this uncivilized usurpation, it considered as "uncivilized immanencization" that the "uncivilized" concept was reproduced and reconstructed. The logic that Europe which is the inner world as "civilization" must acquire "predominancy" to the external world of "uncivilized" is important here. In order to find out predominancy, naturally the difference is need. Under these circumstances, monsters were represented as the"uncivilized"concept. Here is the reason monsters are variant and negative. Monsters are just the representation of culture.

はじめに

今日、ヨーロッパでは単一通貨としてユーロが流通しているが、導入せずに従来の通貨を使用している国もある。そうした国のひとつであるスイスには、かつて興味深いある一枚の紙幣が存在していた。暗緑色を基調とした、1978年発行の“旧50スイス・フラン紙幣”である[1]。紙幣の歴史や造形的意味などには注目すべきものもあるが、紙幣を見る者の関心はおそらく、ある一点に収斂していく。それは、紙幣表面の右手に一見頑迷そうな人物の肖像と、左手になにやら奇怪な姿の「生物」らしき存在がモティーフとして配されているという、いかにも奇妙な構図だ【図版１】。この紙幣が醸し出す異様な雰囲気はいったいなにか。国家的文化産物に特異なモティーフが配されているのはなぜか。いずれにしても、現時点でひとつだけ言及できることがある。描かれている「生物」は、明らかに実在のものではないという事実だ。この想像上の異形なる存在を、ここでは仮に《怪物（monster)》としておこう。

一方、人物は実在する。相反するかのような《実在》の人物と、《架空》の怪物という２つのモティーフ。じつはこの関係性をみていくうちに、モティーフの人物が生きた時代の驚嘆すべき事実が顕現してくるのだ。怪物の形態も、そして付随する逸話も、人間によって創り出されたものであるのはいうまでもない。創出された怪物の種類は、それこそ無限ともいえる数を有する。怪物はその数からも、非常に多様な解釈ができるはずである。

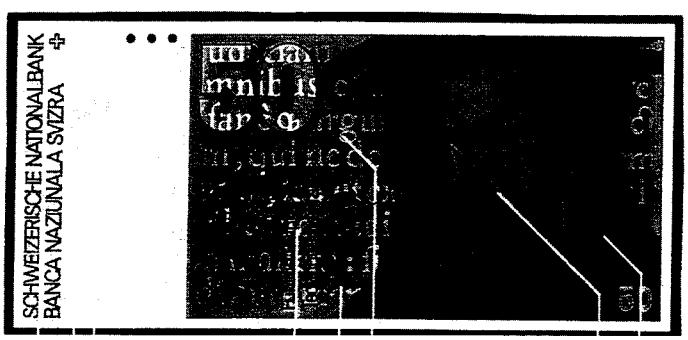
にもかかわらず、これまで怪物に関する研究は必ずしも多くはなく、ほとんどが怪物の「異形性」や「怪奇性」、「敵対性」、「反社会性」、「周縁性」などに拘泥し、《恐怖の表象》として扱っていた。この視点の偏在には、怪物を一義的なものとする危険が伴うだろう。また、さまざまな怪物を引き合いに出すだけであり、“怪物紹介”の感が否めないことにも苦言を呈せなければなるまい。

そこで本稿は、従来の研究が看過してきた観点から怪物を捉える。すなわち、「怪物が文化を創造した」というものである。これにより、《怪物＝恐怖の表象》として成立していた公式が、《怪物＝文化の表象》へと転化する。事実、ヨーロッパにおいて怪物は、文化が構築されていく上で重要な役割のひとつを担っていた。この眼差しの照射は、最終的に怪物を通して垣間見ることのできる、ヨーロッパ文化の深層をえぐり出すことへと帰結するはずだ。その意味において、《怪物＝文化の表象》という視点は、筆者が今後おこなう怪物研究を深化させるものであろうし、ゆえに本稿は枢要な起点のひとつといえる。

だが、あまりに大きなテーマであるため、本論では前述の紙幣を手がかりとして、近世ヨーロッパのいわゆる「博物誌」に登場する、「未開」概念の表象としての怪物たちに限定して、そのありようについての考察を目的とする。それにはなによりもまず、旧50スイス・フラン紙幣のモティーフとなっている、人物と怪物の関係を探る作業から始めなければならない。

Ⅰ．紙幣の解読から

肖像の人物の名は、コンラート・ゲスナー(Konrad Gessner 1516-65)。1516年5月26日、スイス・チューリヒの毛皮加工職人の家庭に生まれた該博な学者である。ゲスナーの業績といえば、なにより1551年から８年にわたって上梓された、全４巻の浩瀚な著作『動物誌』[*Historiae*



【図版１】 旧50スイス・フラン紙幣（見本）．表面.

animalum][2] が挙げられる。これは博物学について、それまで観察・研究・考察・収集・記述された事柄のすべてを集大成するという、彼が抱いていた壮大な構想の一環として、「動物」の体系化が試みられたものである。未完の遺作となった第５巻をあわせると4500頁にもなり、木版画による図版が約1200葉収録されている[3] この一大動物書は、その後ラテン語の原本からドイツ語のダイジェスト版が出版され、広く普及することになる。

おもしろいことに、ゲスナーは以前から蒐集していた厖大な博物標本・図版を、自宅の“博物館”と称した部屋に陳列し、また実際に動物を何匹か飼育していたという[4]。博物誌学的関心の強さがうかがえるエピソードだ。そんな彼は、さらに博物誌第二の集大成として、「植物」を体系的に発展・編纂しようとする。しかしながら、『植物誌』[*Opera botanica*] の出版は、大英博物館が設立された1753年であった。ゲスナーが、当時猖獗を極めていたペストによって、その生涯に幕を閉じた1565年12月13日から約200年後のことである。『動物誌』内での動物のラテン語名は、現代動物学において数多く継承されており、こうした偉大なる業績を残したゲスナーが、スイスの著名人として認知されるのも当然のことと思われる。

一方、奇妙な「生物」についてはどうだろうか。その正体は、現在の南アメリカ・パタゴニア地方に棲息すると考えられていた“スー（Su)”という肉食獣である。むろん想像上の「動物」だ。イギリスの聖職者兼記述家であるエドワード・トプセル（Edward Topsell 1572-1625）の『四足獣誌』[*The historie of the fovre-footed beastes*, 1607] には、スーに関して次のような記述がある。

> 新しく発見された世界には“ギガンテス”という地域があり、そこに住む人々は“パタゴネス”と呼ばれている。その国ははるか南方に位置し、気候も寒いため、住民は“スー”と呼ぶ獣の皮を着ている。スーとは、現地の言葉で「水」を意味するが、それはこの獣が水辺に棲息していることに由来している…（中略）…。
>
> 毛皮を狙って狩人が襲おうとすると、スーは幅広の大きな尾で覆って背中に仔を乗せ、ものすごい速さで飛ぶ。スーの怒りは凄まじく、近づくものはなんであれ、殺してしまうので犬も人も近づけない。そこで狩人は、地面に大小の穴をいくつか掘り、穴の上を枝などで覆って落とし穴を作る。うまくスーがその上に乗れば、仔ともども穴に落ちて捕らえることができるのだ。
>
> この残酷で、人に馴れない、性急で獰猛で貪欲で血生臭い獣は、もはや独力で狩人の知恵と策から逃げられず、狩人が穴の近くで待機していることを知ると、歯（牙）でもってまず仔を皆殺しにする。仔が捕らえられて、飼い馴らされるのをよしとしないのだ。そして、狩人が穴の周りにやって来るのを見ると、吠え、叫び、唸り、喚き、途轍もなく恐ろしい不愉快な音を立てる。スーを殺そうと周りに集まった人間は、不快な音に少なからず驚く。だが、最後には抵抗虚しく、投げ槍や長槍で殺され、皮を剥がれ、死体はそのまま穴のなかに放置される[5]。…

スーは、他の博物誌、旅行記にまでその珍妙な姿で登場し、どの著作でも異様な形態・習性には大差がない。当時は既存の図版や記録が流用され、ときには剽窃されることも多かったため、スーの原型を辿る作業は難しい。筆者が調べた限りでは、

【図版２】 ゲスナー『動物誌』．ドイツ語版.

スーが人口に膾炙するようになるのは、近世以降のことと考えられる。一説には、鮮新世後期から更新世にかけてパタゴニアに棲息していた貧歯類の一種、メガテリウム（Megatherium）ではないかといわれる[6]が、たとえスーがメガテリウムという古代生物のヴァリアントであろうと、想像上の「生物」であることには変わりはない。

じつのところ、トプセルの『四足獣誌』は、ゲスナーの『動物誌』の第１巻と第２巻を英語に翻訳、要略したもので[7]、『四足獣誌』のスーに関する記述は『動物誌』のそれである。これは、ゲスナーが動物を体系化すると謳いながら、架空の「動物」をも記録していたことを意味する。しかも、まことに如実なリアリティをもって、だ。さらに種をあかせば、スーは『動物誌』内で記述されるだけでなく、ドイツ語版の扉絵として配されているのである【図版２】。つまり、スイスの人々の多くがゲスナーの『動物誌』を読む際、スーを眼にしていたことになる。スイスの国家的著名人としてのゲスナーと、その主著を異形なる姿でもって飾ったスー。動物誌の扉絵に、虚構の「動物」が配されるという強烈なインパクト。なるほど、それらが対となって紙幣のモティーフとなるのも頷ける。

スーのような想像上の異形「生物」、つまり《怪物》がいかにわが物顔で跳梁していたかは、これまで著された幾多の書物を博捜してみればわかる。ギリシア・ローマ時代にまで遡れば、紀元前５世紀の歴史家ヘロドトスや、紀元前４世紀にはクドニス出身者で、医師兼歴史家のクテシアス（Ktesias）などがその著作のなかで、インドにいるとされた不可思議な動物や人間について記述している。また、アレクサンドロス大王は東方遠征の際、大勢の学者たちを同行させて、多くの奇妙な事象・存在について記録させている。その後、紀元１世紀にプリニウスによって、主にアレクサンドロス大王の東方遠征の際に収集された情報から、全37巻からなる『博物誌』［*Naturalis historia*］が編纂され、ここにも夥しい数の異形の人間・動物・植物が記録された。こうした異形なる存在に関する記録は、いまだ「未知」の世界であった北方ヨーロッパやアジア、アフリカの自然誌、および紀行文から始まったと考えられている。

２世紀末になると、聖書と並んで中世のベストセラーといわれる教本『フィシオロゴス』［*Physiologos*］が成立し、動物（空想上のものも含む）を介して、宗教・道徳上の教訓が、とくに旧約・新約聖書からの引用によって表現された。ちなみに「フィシオロゴス」とは、ギリシア語で *φυσιολόγος*「自然を知るもの」の意である。『フィシオロゴス』での異形の記述は、大プリニウスの『博物誌』のそれとともに、中世ヨーロッパにおいて広く流布する『中世動物寓意譚（ベスティアリ）』［*Bestiary*］の祖型となっており[8]、この段階でいわゆる一角獣や人魚などの基本的概念が誕生したのだという。

やがて、13世紀のトマ・ド・カンタンプレ（Thomas de Cantinpré　1201-63）が著した『自然の事物について』［*De Naturis rerum,* 1228-44］、14世紀のジョン・マンデヴィル卿（?-1371）の『マンデヴィル卿の旅行記』［*Sir John Mandeville's travels*, 1366］などによって、異形なる人間や怪物はさらに深く一般に浸透することになった。15〜16世紀に入って、自然科学が真の勃興を果たすと、異形は世の終末を告げる“奇兆”としてのみならず、“自然の神秘”や“驚異”としても解釈されるようになる。

そして、ゲスナーの『動物誌』刊行に前後して、堰を切ったように多くの「怪物誌」が出版されるのだ。たとえば、コンラード・リュコステネス（Conrad Lycostenes 1518-61）の『奇異ならびに前兆の年代記』［*Prodigiorum ac ostentorum,* 1557］や、高名な外科医アンブロワーズ・パレ（Ambroise Paré 1517-90）の『怪物と驚異について』［*Des monstre et prodiges*, 1573］、ウリッセ・アルドロヴァンディ（Ulisse Aldorovandi 1522-1605）の『怪物誌』［*Monstroum historia,* 1599-1664］、ヨハン・ヨンストン（Johann Johnstone 1603-75）の『禽獣虫魚図譜』［*Historia naturalis*, 1650-53］など、枚挙にいとまがないほどである。

ギリシア・ローマ時代からのあらゆる文献を渉猟したゲスナーが、また他の研究者が異形なる怪物たちに疑問を抱いたか否かは、重要な問題ではない。ここでは、いわば「学問」の領域にまで、その棲処が広げられたことに刮目すべきだ。たと

え創り出された存在であれ、怪物の記述が書物、ましてや「学術書」という形をとって巷間に流布してしまえば、真偽は如何にせよ、圧倒的なリアリティや説得力をもって、人々に浸透してしまうのは必然であろう。当時、博物誌は貴重な情報源であり、描写されている異貌の世界や生物は、いやがうえにも、読む者をして現実と虚構の観念を失わせるには充分だった。

さらにもうひとつ特筆すべきなのは、それまで神話や伝承のなかで語られてきた怪物が、博物誌学の対象として取り込まれたという事実である。具体的な棲息地域や習性を新たに付与されて、だ。前出のゲスナーの『動物誌』にも、スフィンクスやユニコーン、マンティコラ（Manticore）などのこれまで語られてきた怪物たちが登場する。神話・伝承の怪物が実在する動物、そして新しく創り出された怪物（現に近世で創造された怪物も多数存在する）とともに、一緒くたになって記録されているのだ。むろん実在の動物さえも、その容姿や習性は、かなり事実とかけ離れたものではあったが。古典時代でも、ギリシア神話のケンタウロスや、キマイラなどがプリニウスの『博物誌』に記載されてはいたが、近世に比べれば、それほど顕著に見られるものではなかった。

以上のような現象は、いったいなにを意味するのか。その前に、怪物というものがどのように解釈できるのかについて述べなければならない。いずれにしても、旧50スイス・フラン紙幣がこうして近世ヨーロッパの博物誌学における怪物現象を、現代のわれわれに端的に物語るものであるのは間違いない。

II. 怪物の解釈

語源を辿れば、一般に《怪物》を指す英語のmonsterは、ラテン語でmonstrum「驚嘆すべきもの」に由来し、元来「神聖な兆し」「神からの警告」を意味していたという。そして、monstrumは同じラテン語の動詞monēre「警告する」を語源とする。それは、怪物としての異形の発生が古代において凶兆、すなわち神からの警告であるという考え方に依拠しているためだ。古代オリエントの時代から、異形のものの誕生を歴史の行方を占う予兆と見る考えは存在していて、夢占いや鳥占いと同様、いわゆる《怪物占い》なるものの伝統が連綿と伝えられていたらしい。ラテン語のmonstrumや、それと同義のギリシア語 τέρας は本来、占術の術語に属する言葉であり、地震や洪水、彗星、日蝕、落雷などの特異（であるとされていた）現象、あるいは炎の雨や、誰もいない森のなかで突如として湧き起こる大軍勢の雄叫びなど、あらゆる種類の超常現象がじつはmonsutrum（τέρας）と呼ばれていた[9]。このmonsturumは、「予兆」を意味する他の語であるostentumやportentum、prodigiumなどの、さらにmiraculum「不思議」「奇跡」（<mirai「驚く」）の類義語としても用いられていた。

また、フランス語と語形を同じくする中世英語のmonstreという表記は、1120年に編纂された『オックスフォード詩篇』［*Oxford psaltier*］に初出するのだという[10]。必ずしも、動物ないし人間とは関係のなかったこの語が、明確にその意味として限定されるようになるのは、16世紀後葉以降とする説がある。

たとえば、『オックスフォード英語辞典（OED）』に典拠すれば、monsterの語義は以下の５通りとなるだろう。

①驚異的・不思議な出来事・もの。
②通常の形象からひとつないしそれ以上の部位が（自然から）逸脱した動物・植物。
③ケンタウロスやスフィンクス、ミノタウロス、または紋章上のグリフィンやワイバーン（Wyvern）などの獣と人間の要素、もしくは２つないしそれ以上の動物の要素が組み合わされた想像上の生物。
④非人間的容貌、残酷性や邪悪性。
⑤巨大な動物、あるいはなにか巨大なものや動かしにくい大きなもの[11]。

怪物の大きな特徴のひとつとして、②や③のような《異形性》は看過することができない。怪物の様態を些細に見てみれば、現存する生物たちの要素の組み合わせないし逸脱から成立していることがわかるからだ。ここで、すべての怪物を引き合いに出すわけにはいかないが[12]、たとえばキマイラは、獅子の頭部と前脚、牡山羊の胴体に後脚

(頭部があるものも)、蛇の尾からなる[13]。グリフィンは鷲の頭部に翼、前脚、そして獅子の胴体に後脚の組み合わせで[14]、さらにコカトリス(Cockatrice) は雄鶏に蝙蝠の翼、蛇の尾となっている[15]。ドラゴンに至っては、そのバリエーションは豊富であるかのように考えられているが、基礎となるのは蜥蜴の体躯であり、そこにさまざまな要素が付与されているだけである[16]。

次に、1571年にパリで出版された、モーリス・ド・ラ・ポルト (Maurice de la Porte 1531-1571) の『形容辞彙』[*Les epithètes*] をみてみよう。この著作は、ある名詞について当時の文学者がどのような形容辞を用いているか、ポルトが当代の文学作品を渉猟し、そこから蒐集してきた形容辞を列挙したものである。件(くだん)の名詞が難解と思われる場合は、説明が添えられている。試みに「怪物」を牽引してみると、その見出しの下には次のような夥しい数の形容辞が列挙されているのだ。

monstre　ぞっとする、おぞましく生まれてきた、残酷な、醜悪な、恐ろしい、不愉快千万の、奇怪な、怖い、アフリカの、野蛮な、並外れた、粗野な、身の毛のよだつ、みっともない、忌まわしい、醜い、驚くべき、不思議な、怖がらせる、不安にさせる、呪うべき、破滅へと導く、不吉な、二重体の、新奇な、前兆となる、憎むべき、摩訶不思議の、三頭の[17]。

負性のイメージを喚起するものとして、他の形容辞はもはや存在しないのではないかとの錯覚を起こすほどの言葉の奔出。これは、当時の怪物に対する人々のイメージを知る上で、重要な手がかりのひとつである。なかでも、「アフリカの」という形容辞が記載されていることは、特筆に値するだろう。これがいったいなにを意味するのかについては、後述する。

以上のことから、怪物の大きな特徴は《異形性》と《負性》ということになる。その証拠に、怪物の一般的概念は『オックスフォード英語辞典』、および『形容辞彙』での内容と見事に合致する。従来の研究者が上記の二側面に拘泥し、《恐怖の表象》と論じてきた大きな理由がここにある。

たしかに、異形性と負性が怪物を構築する上での肝要なファクターであることは、認めざるを得ない。しかし、これだけではあまりに皮相的だ。怪物を「さまざまな生物の部位が組み合わされた有機的存在」[18] と論ずる研究者もなかにはいるが、怪物が真に有機的であると言及するには、２つの特徴に隠されたものを見出さなければならないだろう。

あくまで異形性と負性は、怪物の表層的特徴なのであり、ここで新たに提起したいのは《関係性》である。むろん怪物はそれ自身だけでは、怪物たりえない。「人間」との有機的な関係性のなかでのみ、息づくことができる。繰り返すまでもなく、怪物は創造されたものだ。だが、それは創り出した側自身の創造でもある。別言すれば、怪物を通して見ることができるのは、「人間」としての自己像である。こうした《関係性》に則った上で、従来いわれてきた怪物の二側面について考えた場合、なぜ異形性で負性なのか、いやそうでなければならないのかを理解することができる。以後、近世ヨーロッパの社会的・文化的コンテクストから、「未開」と絡めて博物誌の怪物を論じる根拠がここにある。そしてこれこそが、文化表象としての怪物のありようを浮き彫りにする、本論の重要な作業なのである。

III.「未開」の簒奪と内在化

改めて指摘するまでもなく、ヨーロッパは絶えず異民族の侵入に脅かされ続けた世界であった。そうしたヨーロッパにあってみれば、なおのこと外的世界は恐怖の対象であり、同時に好奇の眼差しを向けざるを得ない領域だった。とりわけ、驚異にみちた世界だったのはオリエントであったという[19]。ギリシア・ローマ時代より、未知なる世界について好奇と恐怖が綯い交ぜになったかに思える記録が数多くなされ、中世、近世とその隆盛を極めたのは、なににもまして未知への驚異、そして関心によるものだ。ここでは、未知なる外的世界である非ヨーロッパ世界を「未開」として解釈していこう。

そもそも博物誌学的関心とは、主に２つの欲求

からなる。“知識欲”、そして“蒐集欲”。蒐集欲は、いわば珍奇なものを身近に置いておきたいという欲求であり、さらにそれは“開示欲”へと発展していく。「未開」の事物に関していえば、それまで博物誌学は、基本的に情報として集めるのみであった。実際に、「未開」の地を探索する技術が皆無だったため、数少ない情報から事物を知り、そこに想像力を介入させるしかなかったのである。古典時代の博物誌学家にとっては、神話も貴重な情報だったのであり、だからこそプリニウスの『博物誌』には、神話に登場する怪物たちを再解釈した記録がなされたのだ。神話がなんらかの事実をもとに創造されたものであると信じて、である。

ところが、近世になると状況は一変する。近世とは、一般的に16世紀初頭から18世紀末ないし19世紀初めまでの約300年間を指し、まさにこの時期は博物誌学にとって、大きな転換期であった。ここで多大な影響を与えたのが、２つの社会的・文化的コンテクスト、すなわち“ルネサンス”と“大航海時代”という潮流である。

当時、古典文化の文芸復興という動きによって、ギリシア・ローマ時代の文献研究が盛んになされていたことはいうまでもない。いいかえれば、これはそれまで蓄積された知識を体系化しようという動きである。博物誌学も例外ではなかった。クテシアスやプリニウスなどの著作に改めて目が向けられ、そこでの記録を再解釈し、近世の博物誌学へと取り込もうとしたのだった。17世紀末までは、非ヨーロッパ世界との接触はきわめて断片的であり、「未開」というものが驚嘆を込めて、観念的にヨーロッパ世界と対比させられていたのだという[20]。断片的であったからこそ、古典時代からの既存の著作に記録された「未開」の珍しい事物に関する情報を集めるのみならず、事物そのものを眼にしたい、手に入れたいという欲求が芽吹いてきたとしても想像に難くない。さらになんらかの形で蒐集したいとも。接触が皆無であったのならば、こうした欲求は生まれなかったであろう。

ときにルネサンスは、単なる古典復古運動ではなく、人間活動全般にわたる革新運動であるともいわれる。だとすれば、この近世の博物誌学における対象への眼差しの変化、いや強化は、ある意味、欲求の革新であるといえるのかもしれない。こうした博物誌学家の欲求に呼応するかのようなもうひとつのコンテクストが、大航海時代である。

16世紀から18世紀にかけて、ヨーロッパは「未開」への認識の拡大によって、人類の空間的な分布を明らかにした。とくにこれは、ルネサンス期以後のヨーロッパ世界の、航海技術と火器を中心とする軍事技術の、他の世界への優越によって可能になった[21]。たとえば、1492年にクリストーバル・コロン（コロンブス）が大西洋を横断してアンティル諸島を発見し、引き続きアメリカ大陸に到達したことをはじめとして、1498年にはヴァスコ・ダ・ガマが喜望峰をまわるのに成功し、インドへの航路をひらいた。1500年には、ポルトガルの提督カブラル（Cabral 1460頃-1526）がブラジルの海岸に上陸し、1519年になると、コルテスがメキシコに上陸して大陸の組織的征服を開始する。1522年には、ついにマゼランの船隊が３年がかりの航海によって、初の世界一周を成し遂げている。

こうした「地理上の発見」といわれる大航海時代は、人々の「未開」への関心をさらに強めることになった。むろん、それまでも「未開」概念は存在していたのだろう。だがそれは、外界からの不確かな情報に頼らざるを得なかった。「未開」とは、アモルフなものであったのだ。

ルネサンスによって、それまでの「未開」概念としての事象が博物誌で再検討・解釈される一方で、大航海時代により実際に「未開」へと進出し、それまで曖昧だった「未開」概念を、より具体化できるようになる。近世は、実際に「未開」の地へと踏み込み、その証となる、それまで見ることさえ叶わなかった珍異な事物を蒐集することが可能になった時代であった。結果的に、「未開」の珍怪な事象への関心が憧憬から希求へと変化し、博物誌学的関心が昂揚していったのも納得がいく。実際、キリンやサイ、ゾウなどの動物や現地の植物といった、珍妙と目に映る多くの事物がヨーロッパ本土へと持ち込まれているのだ。きっと、それらが醸し出す未知の奇異さに、人々は驚嘆の声をもらしたに違いない。

面白いのは、持ち込まれた事物の多くが「未開」のままの姿でとどまったことである。本来「未開」という外部から、なんらかの事物がもたらされた場合、その事物は環境の変化に伴って、内部化、

ここでは「文明」化されるはずである。だが、そうはならなかった。いや、そうしなかった。「未開」は「未開」でなければならず、むしろ「未開」のもののままで保とうとした。いわば、ヨーロッパ世界のうちに「未開」を保存しようとしたのである。

こうした現象は、単なる珍奇なものの蒐集という枠組みを超えた、ヨーロッパによる「未開」世界の征服を意味していた。まるで戦利品であるかのように、である。その意味において、「未開」の事物をヨーロッパへと持ち込むことは、まさしく《「未開」の簒奪》だった。さらにいうなら、ヨーロッパ世界内での「未開」の保存は紛れもなく、文化変容の論理を無視した《「未開」の内在化》であったのだ。

簒奪された珍奇な事物から、再構築される新たな概念によって、より明確な「未開」が内在化されていく。遠い「未開」が近い「未開」へとなる。この「未開」の簒奪と内在化は、「未開」を特定し、曖昧な「未開」の減少と明確なそれの増加をもたらした。「未開」の精緻化とでもいうべきこれらの現象によって、世界は拡大したのである。そして、内在化された「未開」を顕在化するために、怪物を含めた珍奇なるものを開示させたものこそが、博物誌だった。では、なぜヨーロッパは「未開」を求めたのだろうか。

「未開」[22]が存在するものではなく、あくまで創り出された《概念》であることは、もはや自明の理である。それは、《差異化》のメカニズムによって創出されたもので、そこに見出されるのは、創り出した側の《優位性》だ。本論の場合、ヨーロッパという民族（世界）のそれということになる。そして、「未開」との《関係性》を構築し、獲得した優位性から、ヨーロッパは自らのアイデンティティを見出していったのである。差異化についての詳細は、デリダやドゥルーズに譲ることにするが、このメカニズムは時代背景いかんを問わず、さまざまな集合レヴェルにおいて、そして個人レヴェルにまでみられる、普遍的なものであるということをここでは強調しておきたい。

ヨーロッパにとって、差異化の対象となるものが、非ヨーロッパ世界である外界以外にあり得なかったのは当然である。その世界がヨーロッパと同じであっては困る。「世界に冠たる」ヨーロッパこそが、もっとも「優れて」いる。それ以外は、「劣った」ものでなければならず、「優れた」ヨーロッパを証明するには、「未開」が存在しなければならなかった。もし、境界の向こう側が存在しなければ、それを創出しなければならない[23]。そのためにも、「未開」を具体的に表象する対象が必要だった。たとえば、新世界で「発見」されたインディオを「人間」とみなしてよいかどうか、また彼らが神の福音を伝えるに値する存在であるかどうかさえ、激しい議論の的になったことがあった。結果的には1537年になって、「インディオは人間である」というローマ教皇の回勅により論争に決着がつけられた[24]が、これは当時における「未開」世界との邂逅への戸惑いと同時に、差異化の対象としての具体的な「未開」が希求、検討されたことを示唆する逸話である。

Ⅳ.「未開」概念としての怪物

近世ヨーロッパの博物誌で認知されていた怪物の多くももちろん、「未開」の簒奪・内在化の産物だ。しかし、実在するはずのない怪物をサイやキリンなどと同様、ヨーロッパに連れてくることはできない。では、そう解釈する本論の証左はどこにあるのか。

結論から先に述べれば、そこには《想像力の連鎖》がある。これは、なんらかの珍怪な生物がもたらされた時、そこから連鎖的に考え得る生物が他にもいるのではないかとする発想である。想像力の連鎖の根拠は、「未開」の動物たちが近世の人々にとって、ヨーロッパに連れてこられるまで、怪物そのものであったことに起因する。大胆にいってしまえば、当時あらゆる「未知なる動物」は《怪物》だった。簒奪されてきた「未開」の（元）怪物。そして、そこから連鎖的に創造される怪物。虚像化された怪物は、外なる「未開」から内なる「未開」を創造した結果なのである。これもいわば、「未開」の内在化といえるだろう。

「未開」概念として、怪物がいかに当時の人々に大きな影響を与えていたかは、前出の『形容辞彙』におけるmonstreの項に「アフリカの」という形容辞があったことからもわかる。その影響は、文学にまで及んでいたのだから、当時「未開」であっ

たアフリカと怪物を結びつけて考えていたことは間違いない。そこには、《アフリカ＝「未開」＝怪物の産地》という図式が成立していた。怪物は近世の人々にとって、アフリカをあらわすひとつのメルクマールであったのだ。

また、スーはパリで1610年に出版された無名の世界地図や、おもにイギリスとオランダで活躍した、オランダ生まれの地図製作者ホンディウス（Jodocus Hondius 1563-1612）による1613年の地球儀（グリニッジ国立海洋博物館所蔵）などに描写されている[25]。スーもまた、「未開」概念の表象であった。

興味深いことに、近世の博物誌のなかには動物のアマルガムという怪物だけでなく、「未開」世界に住むとされた怪物人種も、数多く記載されている【図版３】。たとえば、頭がなく、胸部に顔のあるブレミュアエ（Blemmye）や、犬頭人であるキュノケパロイ（Cynocephales）、大きな一本足で、まるでそれを傘のように頭上にかざしているスキアポデス（Sciapodes）などである[26]。まさしくこれは、近世ヨーロッパにおける「未開」人の像そのものなのだ。人間の体躯が基盤となって、そこにさまざまな変形がほどこされているという点からも、ここには差異の特徴である《類似》が色濃くあらわれている。差異化には必ず、多少なりとも《類似》が必要[27]となる。いわゆる「未開」人には、人間の片鱗がなければならない。それは、ヨーロッパ人が「文明」人として、自らを人でありながら人にあらざる「未開」人と比較して、《関係性》を見出し、差異を獲得しようとした意識の体現でもあった。怪物の大きな特徴が《異形性》と《負性》であるゆえんが、ここに垣間見えるのではないだろうか。

【図版３】「未開」人としての怪物人種.
S･ミュンスター『世界地理誌』. 1544年.
向かって右からキュノケパロイ，ブレミュアエ．一番左がスキアポデス.

「未開」概念として怪物が認識されていたことは、先のコロンの第一次航海における日誌に、次のような記述がなされていることからも容易に理解できる。

1492年11月4日　日曜日

…その地から遠く離れたところに、人間を食べる一つ目の人間や犬の顔をした人間がいて、人を捕らえては首をへし折り、血を吸い、男根を切り取ることを〔提督は〕知った[28]。…

1493年1月9日　水曜日

…前日、提督がリオ・デル・オロ川へ向かった際、〔提督は〕人魚が３匹、海面からかなり高く飛び上がるのを見たが、絵に描かれているほどは美しくなかったが、ともかくも人間の顔をしていたこと、そして〔人魚は〕以前にもギネアのマネゲタ海岸で見たことがあると述べている[29]。…

これは、コロンが航海に先立ち、さまざまな怪物の情報を得ていたことを物語る。つまり、非ヨーロッパ世界において、一つ目の人間や犬頭人、人魚といった怪物に遭遇するであろうことを事前に知っていたのだ[30]。

また、彼がアラゴン王国の糧食書記（エスクリバーノ・デ・ラシオン）ルイス・デ・サンタンヘル（Luis de Santángel ?-1498）に1493年2月15日付で宛てた書簡にも、怪物に関する記述がある。コロンは、訪れることができなかった地域の怪物人種の存在を、次のようにほのめかしている。

…なぜなら、この107レグアを超えた西方に、わたくしが訪れなかった地方が２つ控えているからです。ひとつはアウアウと呼ばれ、その地では尻尾のある人間が生まれるということです[31]。…

ところが、自分の足で地を踏んだ地域となると、その見解はまったく逆のものとなる。それまでいわれてきた怪物人種の存在を、以下のように否定しているのだ。

> …これらの島では、これまでのところ、多くの人が考えるような奇怪な人間は見ませんでした。それどころか、誰も彼も皆、とても端整な顔立ちをしています[32]。…

以上のような航海日誌や書簡の記述から、コロンがさまざまな書物を読んでつくった怪物のリストなるものを頭に刻み込んで航海し、それらが存在するのか否かをチェックしていたことは明らかである[33]。この一覧表の情報源こそ、当時流布していた幾多の博物誌だったのであり、ゆえに彼の日誌には、プリニウスなどの博物誌における説明がときおり添えられているのだ。だが、なにより彼にとって大切だったのは、自らの経験であったのだろう。彼は事前に知った怪物人種について、航海中での体験の照らし合わせて修正していたのだから。コロンが怪物をひとつの手がかりとして、その存在を修正しながら、白紙であった「未開」世界を塗りつぶしていったことがここからは窺えるだろう。こうして、さまざまな「未開」に関する報告がなされ、世界は拡がっていった。結果、それらの情報が博物誌へとフィードバックされ、怪物はその住処を追い立てられ、やがて姿を消していくことになる。

いずれにせよ、「未開」人としての怪物人種が、近世ヨーロッパの博物誌において、過剰なまでに記録されたことも含めて、怪物が「未開」概念の構築を担った役割のひとつであるのは、紛れもない事実である。むろん、博物誌に記録されたすべての怪物が「未開」を知らしめようとしたのではない。ただ、その数があまりに多いということだ。語られてきたものと、新たに創出されたそれを《怪物》というひとつの大きなカテゴリーに集約することで、混濁とした「人間」と「怪物」の世界を、より明確な境界線でもって仕切ろうとする博物誌。簒奪され、内在化された「未開」を顕在化することによって、「文明」と「未開」を分断させ、ヨーロッパに優位性をもたらしたそれは、「怪物」の体系化の名のもとになされた《「未開」の演出》であった。そんな近世の博物誌は、「未開」という世界観（概念）を人々に知らしめる文化装置のひとつだったといえるだろう。

おわりに

怪物は、神話、伝承、宗教などあらゆる場所、そして時代に跋扈する。当然、そのトポスによって、怪物の解釈は大きく変わる。本稿で近世を選んだのは、まさに古典から続く未知に対する純粋な「驚異」が依然根付いている一方で[34]、その驚異を克服しようとするかのような「未開」への進出という時代であったからだ。また、見る者を驚異の世界である「未開」へと誘う、博物誌での怪物たちを対象としたのは、とくに《文化の表象》としての存在意義を帯びているように感じたからである。

むろん、本論も怪物に対する眼差しのひとつに過ぎない。場だけでなく、種類もまさに眩暈を覚えるほど多く、ある怪物に焦点を絞って論じるとしても、百家争鳴となるのは間違いない。怪物の像はその姿同様、考察しようとする者の視点の数だけあるはずだ。ただ、どんな怪物論を展開しようとも、忘れてはならないことがある。繰り返しを恐れずにいうならば、怪物とはいるのではなく、つねに創り出されるということだ。そして、怪物が多分に人間、社会、文化を表象している、ということもである。だが、怪物をあまりにネガティヴなものとして捉える研究がなんと多いことか。なかには、歴史的記録を牽強付会的に引き合いに出し、怪物がさも存在したかのように論じる専断者もいる。本論は、そうした現状に準ずるのではなく、怪物の新たな姿を見出そうとした、ささやかな試みである。

註

[1] *Die neue 50-Franken-Note(Le nouveau billet de 50 francs／Il nuovo biglietto da 50 franchi)*, Schweizerische Nationalbank, Zürich, 1978, pp. 2–7
1978年9月発行のこの紙幣については、唯一の資料だと思われる僅か８ページ足らずの小冊

子に詳しい。これは銀行で配布されているもので、フランス語、イタリア語訳でも記述されている。そこには、紙幣の歴史、造形的意味、モティーフ採用の理由などがオールカラーの写真入りで事細かに書かれている。

[2]各巻のタイトルは、以下の通りである（副題省略）。なお、ゲスナー没後、未完の遺作として第５巻が刊行された。第６巻の内容は、「昆虫」になる予定だったらしい。

"… liber primus, qui est de quadrupedibus viviparis"，1551（『第１巻。胎生の四足動物について』）

"… liber secundus, qui est de quadrupedibus oviparis"，1554（『第２巻。卵生の四足動物について』）

"… liber tertius,qui est de avium natura"，1555（『第３巻。鳥類の性質について』）

"… liber quartus, qui est de piscium et aquatilium animantium natura"，1558（『第４巻。魚類および水生動物の性質について』）

"… liber quintus que est de serpentium natura"，1587（『第５巻。ヘビ類の性質について』）

[3]ハンス・フィッシャー『ゲスナー　生涯と著作』、今泉みね子訳、博品社、1994、52頁 [FISCHER, Hans：*Conrad Gessner(26. März 1516-13. Dezember 1565);Leben und Werk*, Kommissionsverlag Leeman AG, Zürich, 1966]

[4]同、123頁

[5]TOPSELL, Edward：*The historie of the fovre-footed beastes ; The English experience, its record in early printed books published in facsimile, no.561*, Theatrum Orbis Terrarum(Da Capo Press), Amsterdam(New York), 1973, pp. 660

[6]荒俣宏『怪物の友　モンスター博物館』、集英社文庫、1994、74-76頁

[7]op.cit., TOPSELL, pp. 11-20

[8]オットー・ゼール『フィシオログス』、梶田昭訳、博品社、1994、200頁 [SEEL, Otto：*Der Physiologus ; Tiere und ihre Symbolik übertragen und erläutert*, Artemis VerlagsAG, Zürich und München, 1967]

[9]彌永信美『歴史という牢獄　ものたちへの空間へ』、青土社、1988、241頁

[10]GREIMAS, A. J. et KEANE, T. M.：*Dictionnaire du moyen français*, Larousse, Paris, 1992, p.421 および DUBOIS, J. et als.：*Dictionnaire étymologique et historique du français*, Larousse, Paris, 1993, p.486

[11]*The Compact Oxford English Dictionary, second edition ; complete text reproduced micrographically*, Clarendon press, Oxford, 1991, pp. 1036-1037

[12]具体的にどのような怪物が人口に膾炙していたかは、以下の2つの拙稿を参考にされたい。

・筆者修士学位論文「綺想のカリカチュア－西欧異形の表象分析－」、早稲田大学大学院人間科学研究科、2002、38-104頁（第三章 怪物たちの饗宴　～西欧怪物のエンサイクロペディア～）

・蔵持不三也＋筆者「西欧怪物分類表　怪物のタイポロジー／西欧」、〈武蔵野美術 No. 199 特集：恐怖の表象／怪物たちの図像学〉、武蔵野美術大学、2001、16-19頁

[13]COOPER, J. C.：*An illustrated encyclopedia of traditional symbols, with 210 Illustrations*, Thamas and Hudson, London, 1978, p. 63

[14]ROSE, Carol：*Giants, monsters, and dragons, an encyclopedia of folklore, legend, and myth*, Abc-Clio, Inc., Santa Babara, 2000, pp. 153-154

[15]ジョン・アシュトン『奇怪動物百科』、高橋宣勝訳、博品社、1992、280-282頁 [ASHTON, John：*Curious creatures in zoology*, John C. Nimmo, London, 1890]

[16]BESSY, Maurice：*A pictorial history of magic and the supernatural*, Spring Books, London・New York・Sydoney・Tronto, 1964, pp. 152-158

[17]伊藤進『怪物のルネサンス』、河出書房新社、

1998、271頁

[18]同、19-20頁

[19]ジャック・ルゴフ『中世の夢』、池上俊一訳、名古屋大学出版会、1992、11頁［LE GOFF, Jacques : *Les merveilleux scientifique au Moyen Âge, in ; J-F Bergier(Hrsg.), Zwischen Wahn, Glaube und Wissenchaft; Magic, Astrologie, Alchemie und Wissenchaft geschichte*, Verlang der Fachvereine, Zürich, 1988］

[20]川田順造「「善き野蛮人」から「野生の思考へ」 ―“未開”社会とヨーロッパの意識」、194頁。『民族の世界史９　深層のヨーロッパ』、岡正雄／江上波夫／井上幸治監修、二宮宏之編、山川出版社、1990

[21]同、194-195頁

[22]川田順造によれば、「未開」概念には２つの視点が含まれているという。ひとつは関係としての概念で、これは差別するということに意味があり、われわれの社会に対する異社会という関係概念としての意味をもっている。もうひとつは、発展段階説について使用されたような意味での、文明に先行する段階としての、いわば実体としての概念である。本稿では、いうまでもなく前者の視点から「未開」を捉えている。川田順造「なぜ「未開」概念を問題にするのか」、13頁。『「未開」概念の再検討Ｉ』、川田順造編、リブロポート、1989

[23]山口昌男「記号と境界」、34頁。『怪異の民俗学８　境界』、小松和彦編集、河出書房新社、2001

[24]川田、1990、198頁

[25]ウィルマ・ジョージ『動物と地図』、吉田敏治訳、博品社、1993、94-95頁［GEORGE, Wilma : *Animals and maps*, Martin Secker and Warburg Ltd., London, 1969］

[26]LECOUTEUX, Claude : *Cultures et Civilisations Médiévales X ; Les monstres dans la pensée médiévale européenne*, Presses de l'Université de Paris-Sorbonne, Paris, 1993, p. 160-162 および クロード・カプレール『中世の妖怪、悪魔、奇跡』、幸田礼雅訳、新評論、1997、201, 240-241頁［KAPPLER, Claude: *Monstres, démons et merveilles à la fin du Moyen Âge*, Éditions Payot, Paris, 1980］

[27]ジル・ドゥルーズ（1925-95）も、「類似は差異の条件として定立される」と述べている。ドゥルーズ『差異と反復』、財津理訳、河出書房新社、1992、184-185頁［DELEUZE, Gilles: *Différence et répétition*, Press Universitaires de France, Paris, 1986］

[28]『完訳 コロンブス航海誌』、青木康征編訳、平凡社、1993、120頁

[29]同、232頁

[30]ツヴェタン・トドロフ『他者の記号学　アメリカ大陸の征服』、及川馥／大谷尚文／菊池良夫訳、法政大学出版局、1986、22頁［TODOROV, Tzvetan : *La conquête de l'amérique ; La question de l'autre*, Éditions du Seuil, Paris, 1982］

[31]『完訳 コロンブス航海誌』、1993、295頁

[32]同、297頁

[33]ツヴェタン・トドロフ「航海家と原住民」、及川馥訳、442頁。エウジェーニオ・ガレン編『ルネサンス人』、近藤恒一／高階秀爾他訳、岩波書店、1990［Edited by GARIN, Eugenio: *L'uomo del rinascimento*, Gius. Laterza & Figli Spa, Roma-Bari, 1988］

[34]KAMBARA, Masaaki : *“From deformations to monsters”, 〈Monstrum I, Tentatio ; Nuovo Classico Series〉*, Treville Co.,Ltd., Tokyo, 1993, p. 75

図版出典

【図版１】*Die neue 50-Franken-Note*, 1978, p. 3

【図版２】荒俣宏『ファンタスティック12　怪物誌』、リブロポート、1991、17頁

【図版３】op.cit., LECOUTEUX, p.105